

は、運機局が警察に協力を求めないままに終わっているが、中浜、倉地君一味の仕業であった。

要するに日本に於ける革命運動の表面に表われた多くの事件は、少くとも大正十二年の日本共産党の結成までは、アナキストを自認する人々の行動であった。

これらの人々の行動がなにもなかったのだと書きまくっていることは、日本共産党のひやめし食共の共産党へのへつらいと正しい革命運動史の抹殺以外の何んでもあろうか。

中浜鉄は幸徳らのことを次の如く歌っている。
彼等の墓標の裏の裏を見つめろ！

伊藤野枝を語る

—日本アナキズム思想の流れ—

とき 11月2日(土)午後7時

ところ 大阪・太融寺会館

“日本文化史研究会”

チューター・泉氏

主催 赤と黒の会

ルソーに於る政治思想の考察

「社会契約論」を中心に

その二

尾 関

弘

「その一」(大阪あなきすむ第三号)に於て既に

△はじめに▽

△社会契約論までのルソーの思想▽

△ルソーとアナキズム——その矛盾した一致と不一致▽

△ルソーの思想に於る「自由」の概念▽

等について論じた。

△ルソーの思想に於ける国家論▽

ルソーはプラトンのように、国家を一個の有機的な人間として考えた。それ故に、ルソーの考える国家には、完全な人間の完全な人格とでも言うべきものが、窺えるのである。「それは常に正しく、永続的であり、他人に譲ったり分割したりできず、また他人によって代表されることもない」ものであると言っている。たしかにルソーの主張するごとく、主権は代表され得るものではないし、それ故に代議政体を認めるわけにはいかないのだが、ルソーの言うところの主権は、いわゆる△一般意志▽であり、人民の△合致した意志▽である。人民の共通意志を普遍的なものとして

いるのであるが、共通意志は公約的意志しか意味しないのではないか。そして一個の人間にとっては、それにこそしばしば最大の価値を見出すのである。

「政治体の設立は、富者が自らの利益を守るために『一般的規約』を結ぶことを提唱し、人民の同意をもちとることによって成立する。いわばそれは、富者の行なう詐術であり、公共の名において私的利益を確保する方法である」とルソーは言っている。蛇足だが、ここで言われている政治体と言うのは、もちろん国家を指すのである。

「政治が行なわれるということは、強制が働くということであるが、人間が政治体を構成することは、それによって共同の自由を確保するということである。政治体は、自由と強制という相容れない二つの条件を同時に確保しなければならない。それはいかんして可能か。それは、政治が一般意志にのみ従うことによつて初めて可能である。一般意志の表現は法であるから、結局は法に従うことである。」とルソーは続けるが、この論理は我々にとつて論理のすり替えであり、極言すれば「ルソーは逃げた！」の感すらするのである。そこには、彼の政治論の底に流れる「金に対する個」の決定的疎外からくるベシミズムの風潮が、一般意志などと言う観念的オプティミズムでもって解決されているのである。

このようなルソーの思想の正体は次の言葉でさらに暴露される

であろう。「社会契約がむなし公式にならないために、それは暗黙のうちにすべての他の者に暴力を加えることの義務を含んでいる。とくに一般意志への服従を拒む者は、全員によってそれを強制されるこれは単に、かれが自由であるように強いられることを意味する。」

ルソーは、国民国家とか人民国家とか呼ばれるものを観念的に発明したにすぎない。それは実際、国民の国家をも人民の国家をも意味するものではなかった。それはルソーの期待と願望が創り出した「仮説」でしかなかった、フランス革命に於て、ルソーが伝家の宝力とする一般意志に立ったブルジョアジーが国家的利益と称して階級的利益を得たが、ルソー以後の歴史的事実だったのではなかったろうか。また、現代社会に於ては、「人民国家」という大義名分は、ブルジョアジーの階級的利益のみを守る保守反動主義者によってではなく、權威主義的社会主義者、既ちマルクス主義者の使用する概念用語でもあり、「自由であるように強いられる」ことばは、そっくりそのままマルクス主義者に反してやりたいことばである。

「国家を廃止する」というアナキズム理論にしても、プロ独国家の後に「国家は死滅する」というマルキシズム理論にしても、国家は権力実体であり、それ故に支配階級の支配の道具であつてそれ以外の何をも機能しないという考え方に違ひはない。国家利益は、ルソーの論理とは異なり、人民の意志とは無関係な支配者

階級の利益を意味するものであり、むしろ国家利益は、人民の搾取と抑圧の上に成り立つものである。

またルソーの一般的意志の論理も、支配者にその支配の合法性を与えただけである。ルソーは「法に服従することによる平等」を主張したが、法とは常にその時代の支配者によって人民の規制と統治のために作られて来たことを知る我々は、ルソーの論理がむしろ危険であることを悟るのである。個人原理が国家原理を超えて普遍原理たることの理由の一つが、ここにあるのである。

我々アナキストにとって権力体としての国家の問題で必要なのは、ルソーの論及にはなかったが、全てが全て国家に委ねるのでなく、人民の自治能力の高まりが次第に従来国家の保持していた権力機構を社会に還していくこと、究極には社会が国家にとって代るといふ事実を知ることなのである。

▲ルソーの「社会契約」について▼

ルソーにとって「人間同志の間の一切の正当な權威の基礎は約束にある」というのが全てに先立つ前唱命題であった。「つねに最初の約束にさかのぼらねばならない」と言い、その約束とは、人民が人民であるためには、彼らが互いに結びついて一つの政治体をつくるという全員一致の約束であったはずである。この約束こそが社会秩序の眞の基礎であるという。彼によれば、我々はいつの間にか、国家に一般意志の最高の指導者としての地位、共通

の上位者としての地位とか、絶対権力とかを与えてしまっているのである。国家は我々を守る義務を持っており、我々は国家に保護される権利があるという。一体、絶対権力のもとの権力に何の意味があるのだろうか。ルソーにとって国家と社会の概念は、甚だ曖昧である。我々は一応、権力体としての国家、非権力体としての社会という理解を確認しておけば、ルソーの「社会契約」が、実は「国家契約」であったことに気付くのである。とくに、現代社会の国家的権力的構造の風潮が充満している世界では、ルソーの言う「社会契約」が、あるいは支配者にとって都合のよい「一般意志」の先取りが、閉鎖的ナショナリズムを現出しないとは限らないのである。社会契約論、あるいはそれに基くデモクラシーは欺瞞的である故に危険であるのだ。

社会契約についてよく言える最大唯一のことは、「俺はルソーが言うような、そんな約束はしたことがないぞ」の一語に尽きるのである。この単純なことばは、一般意志が特殊意志の集合体でないこと、一般意志とは実は合法性を利用した支配階級の意志であることを鋭く暴露している。

▲とりあえずの結論として▼

このような舌足らずでオッチョコチョイなルソー批判は、ルソー研究をされている多くの学究の徒を傷つける何かの役割しか果たし得ないであろう。ぼくがルソーをほとんど知らずに書いたこ

とが、手前勝手なルソー批判を大胆に行ない得た理由である。それ故、今後ルソーをより深く研究することによって多くのルソーに対する考え方は変わることが十分予想できるし、自分でもそうありたいと思っている。それと共に、京大人文研究にもあるのだが、プロバガンディストとしてのルソー、名声を得たばかりの論争好きの若い評論家としてのルソーが気になって仕方がない。フランス革命の思想的支柱でさえあったルソーですら「圧制的な国家の中にいる人民が、革命によって自由を再び取り戻すことが可能だ」とは決して言わなかったのである。

ヒミコと捧げ銃とエスペラント

山 鹿 泰 治

中国の古文献「魏志倭人伝」は原文は漢字六百六十二字、梁の元帝、紀元五四一年ごろのもので、倭国（日本）から魏国へ使いた者の話を記し、倭国使をうつした図も一枚ついて、原本は北京歴史博物館にある。

倭国は女帝卑弥呼が耶馬台国を統治していたとあるが、ヤマタイが九州か大和か、ヒミコという女がアマテラスと云う女帝かどうか、全然わからない。考古学者が夢中で遺物・遺品をさがしているが、信すべきものが出ない。

このまぼろしのヤマタイ国を唯一のタネにこのごろまた「神話」を歴史にむすびつけようという反動のあせりが目立ってきた。

その別のあらわれは、吉田茂の「国葬」に際して、むかしの夢を思い出させる——自衛隊の「捧げ銃」である。戦時中の神話がここではもう復活してきているのだ。

このような、支配者側の画策を根本から打破するには、社会革命を目的とする全世界労働者のゼネストで、奴らの目のくり玉をでんぐりかえてやるよりほかない。

世界は一つというスローガン。エスペラントが全地球の共通語

現代アナキズム研究

第 2 号 二百円 (〒45円)

工業社会とアナキズム(1)

現代アナキズムの諸問題

非教条的な精神

心情的反逆の「止揚」

非ジャコパン的革命

パリ・5月の反乱

チェコ共産党行動綱領について

カルティエ・ラタンの絶対自由主義共和国

東京部大田区南千束3-26-18

第三平間荘(葦井氣付)

現代アナキズム研究会

岩根 緑 郎
相沢 尚 夫
江口 幹 敵
石地 友
D・ゲラ
R・ポラトン
葦井 友

青年アナキスト討論会

(仮題) 国家をいかにするか?

とき 11月下旬から12月上旬
ところ 名古屋市内

参加(7月28日現在確認)

関西アナキスト学生連合(現代国家論を疑う)

名古屋アナキスト学生連合

(70年をいかに闘うか、現状分析)

関西反戦労働者連合(日本無政府主義運動史)

アナキスト行動戦線(未定)

連絡先(名古屋以東)

愛知県常滑市西ノ口字会下141-2小川気付
(名古屋以西)

大阪市東住吉区桑津町6丁目90山口気付

集会、参加 発言は全く自由、参加希望者はあらかじめ連絡下さい。

青年アナキスト討論集会実行委員会

事務局 大阪市東住吉区桑津町6丁目90山口方
(因幡節)

となること。貨幣制度がなくなり、テクノロジーの技術による経済が万人に公平に配分されること。

これを具現して、それこそ「神話」と思われたユートピアを地上のものとするのだ。

私は一九〇七年からエスペラント語を用いて各国労働者と意見交換をやってきたが、何ひとつ不自由はなかった。(……それで……)という者があるなら私はいつでも挑戦に応じる。)も……

いまこそ「過去の神話」と縁を切って、「未来の神話」へと決断しよう。

風化した革命思想

池田和義

ソ連帝国主義のチエコ侵略は、マルクス主義革命思想の内実を再び根底から暴露したが、同時に、アナキズムが観念の世界において風化しつづけていることも明らかにした。

チエコにおける左翼反対派の登場は、全世界のマルクス主義左翼を飛び越えて、新左翼の位置そのものを陳腐なものとしてしまった。チエコ左翼反対派は、その思想内容において、ロシア革命時の労働者反対派以上に、アナルコ・サンジカリズムを自己のものとして創成しつつあるのだが、未だマルクスの名を冠するとはいえ、このように内容が先行している状況は単にチエコのみではなく、文化大革命の中国労働者革命派、フランスの労働者管理派等、革命的激動のあるところ常に、革命的労働者は全く本質的にアナルコ・サンジカリズムを志向して、あらゆる色あいのプロレタリア独裁派と死闘を繰りひろげている。まさにマルクス主義は、労働者主体の革命的状況の内、その権力主義故に己れの風化した革命思想をさらに一層分解させつつあるといえる。

一九三九年のスペイン革命の敗北と共に、革命運動から消滅したかのごとく流布されていたアナルコ・サンジカリズムは、今、

その思想性においてフェニックスであることを全世界に告げ知らせているのだが、しかしアナキズムの風化は、自由共産社会への展望を開拓することを自から拒否している空間において、急速な自壊過程に突入している。アナキズムの再生とは、今日、アナルコ・サンジカリズムの現在の再変革としてしか提出されえないし、この課題に挑戦する人々によってしか、風化した革命思想の恥部は超克されえないだろう。觀念的なラセン空間を一次元下方に葬ったわれわれの焦点は、すでに日常性の内に立脚すべき空間を創造することの連続過程に合わされている。革命斗争のプログラムはすぐれて自からの実践にあるのであり、何者によっても代行されることが不可能であることにおいて、われわれはわが道をわが手によって創出していく他はない。

この決意を共通として大阪アナキズム研究会は、唯今、一年半の斗いの末に第二期入の飛躍を試行する。

日本アナキスト連盟機関紙
LIBERA FEDERACIO Organe de Anarkista Federacio Japana
発行所 自由連合編集局 東京都新宿北山伏町33(大沢方) 振替東京1447222郵便番号 162
1部30円(平共)1年360円

長詩

自身を滅せ

(または共同体の意味を)

藤 本 正

△ベトナムで戦争は拡大している

横浜・神戸の米軍専用卓頭からはコンテンツ・アンノウの積荷が満載されて行く▽

はじめて あなたと出会ったとき

あなたは 中傷の過中にいた

内外よりする ある種の 中傷の

だから あなたの生と思想の内実が

僕には かえって読みとれていた。

Kと二人で出向いた

雑踏する大阪駅中央コンコースの夜は

まだ見ぬ あなたの風貌を想う

楽しみがあって 黒ベレー帽を目でさがした

ほどなく 品のあるベレー帽のあなたが近寄る
およそ品性などに関係ない 秋山清が
思想の品性を 顔貌の裏にかくして笑いかける

三人は歩みながら どんな話しを交したか
あれは五五年頃のこと

戦後第一次の資本主義の相対的安定期と仮称される

日常が 涇ない思想の退廃をみせて

自覚もなく または偽瞞の革命にも無自覚に

ようやく 大衆をまきこんで

単性繁殖を拡大していた

その日頃 僕は 安吾の言葉をつぶやいていたのだろう
ハセックスの涯にはなにもないV と

分裂以前のアナ連というものがあり

ほえねばならぬ対象が 前後左右に

明確であったのに

石ころでもけとばしていたのだろう きっと

登録の意味とは内面を組織することか

外部を組織されることか

命令は上から權威は下からだ

大衆の中から 大衆の中へとた

己れの大衆部分と前衛部分とを同時性として

何事もなさぬと耐えた 行動のみを 敵性に放てと

そして時代は沈潜することを要請していた

いまもなお執拗 に要請してくる 社会構造の不変契機の

内実

大会形式を副次的にしか信用せぬ

この組織不信者の僕や仲間のみんな

だから 否定性の直接行動の組織を育てる

僕は大会には出たことがなくて

だから死んだ石川老人も植村諦にも会わず

僕はさかんな樹木の山に挫折の草茎を噛み

樹液と赤松の花粉を浴びつつ 運動に参加していた

朝鮮戦争の日常があった。

海をへだてた 日常が

海をへだてることのない 非日常として

おう 砲声はとなりの信太の森の丘陵で

連日集中的にはじけ 村々の窓ガラスを破った

流弾は樹木や濡れた赤土を裂いた

濃密な 敵対の時間のなかで

土壁は一層ひと気なく荒廢し

羽目板に銃弾が食いこんでいた

老農は誤射に傷つき 納屋で質機は不断に稼働した

僕は 軍靴をなお曳ずっていた

いまもなお曳ずっているように

その亡霊の重く銃を担う

軍装の長列へと烈しくかかわっては

苦悩と血債と責任の意味を突返していた

敗戦があり、村に生残る長男は僕一人か

性こりもなく身をさいなめと

生は血臭にまみれ 死の方からのみたどられる

だから 無と反の 価値を発現しよう

だから 僕には 今日の銃声が

敗戦の歴史にふさわしく

だから 帝国主義資本主義国家に

狐狸すむ祠よりする 天皇制の幻視と実体に

独りの 思念を照射させ 視える

米軍事力を新天皇と仰ぐ資本と権力と庶民の交接図絵が
そして僕は 青春の肉を更に衰弱させていた。

天皇制と 天皇思考と その原理とは

シャーマンの呪文の形姿で

海の向うから 四百の基地に有刺鉄線をめぐらし

不断に身辺にあふれかえり

気配もないカービン銃の狂悪さに変質して

虚しい果樹の継木である 民主制を

その論理もない幻想の 軽信の論理を

論理なき論理の有効性で 嘲笑っていた

誰も知らない蔑視が育ち

天皇の詩をかくと

友人は笑ってしまふ または少し驚いて

アナーキストの僕をみる

ぼくはアナーキストだ

けれど僕は 「天皇抹殺論」に複合して

この山陵の起伏の涯 大根の白い花や

陰鬱な桜花散る 丘陵台地から 餓えた

遠くわが村落をも一環とする 一円の地域

血の紐帯をにじみでた 千年の風にのる
無声のもの音を ききとれていた

連綿の歴史に亘って

吹き落ちる スサノオの怨嗟の風に
まれに 不協和に
とおる 声がある

春三月 くびり残され 花に舞うと

アナーキストは 人に名指されたとき

すでに歴然と 他者として立現われ笑い寄るであらう
そして誰もが アナーキストはすでに居ないというとき
彼は明確に立現われるであらう 俺がアナーキストだと
われらの主張は 導きの星なのだ

そして いまこのくにの 伝統は
とぎれない御詠歌となって

くいな鳴く沼沢をこえ 起伏をこえ
法をこえ 論理を食いちぎって
そいつは まぎれもなく
僕達を閉ざそうとする どこへだ

古い極東の 島国の地の涯で 吹きだまる
民衆の若い血とながい汗と悶死の唄を
まるで抵抗感もなく 流すもの

そこに人間性が絞殺され 虐殺の日常に
しかも人は生き 子を孕み産み育てた
代々のかまどや納屋や内倉の湿気にうづくまる
くずよ藁束よ 嵩もなき肉よ くらみよ 呼吸よ
圧殺の謀叛一擲の絶望を反復して耐えて
そこにあなたらは 壁のように思想を刻んだ

青春の日の 祭りの夜々は略奪された
田の苦役と因習との 戦鬪の村よ
眼尻を 天に鈍く見ひらく なにもものも映さぬ
そこひの青眸白眸 憎悪と愛に
あなたらの 貌と掌の節くれた皺よ

天候と搾取と凌辱にひしかれて動乱は流れている
堀りつかれた小川や溜池の 草藻よ菱葉よ光
光りの水よ 雲翳は怨念の表層を流れている
失なわれた 幻しの雑木の森

枯れつきてしまった防風林に

いっとき 田仕事の手をとめて

あなたらは 一陣の風音をまさぐる

無言に生き 暗闇から暗闇に挨拶を交え

柔らかな笑みをたやさずに

さらされた先祖の屍と 絞られた赤児の肉塊をも

青菜の肥とほどこして

だから荒みきり 柔らかな笑みを絶やさぬ修羅に

死にたえていった。 あなたらの

愛とは苛酷であるが

分ち難く国家||資本主義と対置して

その凶暴に対決して

まぎれもなく 非日常である

僕は家敷を売り払った異端として

あなたらの非日常性を追求する 僕の日常として

村の解体を迫るがゆえに その精神を生きる

終末の共同体がもつ非合理性を論理とすること

単なる合理性に屈服しない

具体と総体的な人間像へと定着する

僕が生きた日常を再び

系統的な非日常の変革とする

すでに僕は妖怪である 戦闘力を激発し創出する

その夜 私どもは互いに口数少なく

複合の村は 私一人の想いであつたにちがいない

けれど 私は默契のなかでこのように話した

私も墓場に小舎をたて革命を育てるであろうと

私もまた 乞食にすらならぬであろうと

自身を滅せと 生の拡充と活動をはかれと

自我を棄脱せよと

この国に二度と戦争を起させるなど

伯母よ あなたの僕への遺言は

固く守る

四三、二、一三

編集 后記

卷頭の文章は、「赤と黒の会」が主催した逸見吉三氏による大正期のテロルを語るの再録である。

あい容れぬ階段の二つの交錯する殺意のなかにわれわれがいる。

としたら……

権力とは「にぎって離さぬもの」だとしたら……

自己権力

意志表示

遺志表示？

自らをおしつづんでくる権力の「悪意」をふりはらうのは自らをおいてない。

としたら……

◎

(かつてギロチン社の) 中心人物であった中浜は、彼自身のテロルをほゞつぎのように論理づけたといわれている。

中浜と和田らのあいだには、テロリズムについての解釈のくいちがいがあることがわかった。

和田(久太郎)は福田大將の暗殺をとかく大杉に対する復讐としてのみ理解しようとする。中浜はそれに反対した。中浜はつぎのように考えている。

支配階級はすでに彼らを守るための法律をもち、軍隊をもち、警察をもっている。そして彼らの存在を抹殺しようとする者は、ことごとく刑務所にほうりこみ、ときには絞首台に追い上げて首をしめる。こんどなどは、大震災のどさくさまぎれに、あのような大量虐殺さえも平気でやった。

ところが民衆はみずからを守るべき法律もなければ、軍隊も警察ももっていない。いわんや刑務所や絞首台など民衆自身のものはどこにもない。だから、ひとたび支配階級が民衆を抹殺しにかかったとき、民衆はみずからを守るべき正統な合法的手段をもたない。そこでやむなく非常手段にうったえるよりほか手がなくなる。テロリズムもそのような非常手段のひとつである。

つまり、こんどの事件で軍閥が大杉を不当に抹殺したことに対して、自分たちはその全責任を福田におわせる。そして福田を自分たちの手で死刑にする。だからこれは断じて復讐ではない。当然おこなわれるべき処断である。続わが文学半生期より、

大正テロリスト敗退の理由はこの思考とは無エンであると思う

◎

「革命家の大胆と本能の不足がギロチン国失敗の一つの教訓である」

と逸見氏の文章は結ばれていた。

しかし、不本意に逮捕されたのもあくまで初志をまげず、大逆の目的をとげるために大阪刑務所爆破をはかり、脱走の機会をねらいつづけた中浜らに、そのような方向からの批判はマトを射たものか、どうかは疑問に思う。

殺傷行為は、殺傷事件としてしかつたわらないのだからテロルの内実に触れた、と自認するものは、それを語ろうとするものは……… もうすこし慎重なうろたえが必要に思えてならない。

テロルを論理づける。ということには苦痛がともなりかもしれない。

だが、テロリストの苦痛、などというものは存在しない。

現象のみにかゝれば、ひとつの体制のなかに死んでいく。一人のにんげんの、生の期間がすこし長びいたか、せばまったかの違いがあるにすぎない。

現体制にケツの毛まで見抜かれた「おのれの死」を代償に、おのれは現体制を充たしている。

安全な明日と、不安なきのうがやくそくされている。

ボクにとってテロルは、安全なおのれの死を、どのように生の方へひきもどすか。

存在時間と逆の方向に生きることをつとめるか。
の、意識のさけめに根をもつものである。

「キジもなかならず撃たれまいに」

の類に属する。じつに大衆性を負ったものである。

◎

在フランスの尾関弘から、アナキストインター分裂の手紙がきている。

老いた思想はころせ、老いた教理をころせ。

「インター分裂のとぼちりて宿舎を追われて野宿している」とある。

「大阪あなきずむ誌」は、もともと彼や今沈黙している金子らのはじめたものである。

4号は、とにかく尾関の孤戦に連帯するために急ぎ編集したものであることを后記しておきたい。

一九六八、一〇

因 幡 節

大阪あなきずむ 4号

編 集 因 幡 節

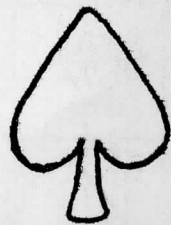
発 行 大阪アナキズム研究会

大阪市東住吉区桑津町6-90

山口氣付

定価 100円

大正七年度



定価 100円